

いつの世の 幾人々の 守りの神となれるを知るか

短歌

真宮起雲選

○ 深野貞子

呼びとめて處を問へば泣伏しぬ母をたづぬる女
願禮

病む母に仕へて名ある花うりの少女の袖に夕風
さむき

○ 金丸ともへ

のこしませし一人子抱きて亡き夫の昔語りぬ燈

火の前

うす月のはのめさ渡る秋の野に雁の聲さくわが
すくせ哉

○ 加藤芳子

新室にうぶ湯匂へる白菊やのぞみの光りたゞさ
みに見る

瑠璃玉の露うつくしき秋の野にはえをはこるか

桔梗刈萱

○ 吉郎絹子

夕雲のちぎれくに飛ぶ見えて鐘冷かさあきの
くれかな

○ 竹尾玉枝

しばしよと白きみ衣の人とめて道を尋ぬる秋の
ゆふ野や

○ 白雪女史

あてがれて彩虹追はゆふと消えて夕野に迷ふ人
の世も哉

子規いづれを指して啼き行くよ母のみ國は月に

好きさと

○ 田 中 文 子

うな垂れて思ひに耽る夜の窓をたくくに似たる

秋の雨哉

○ 紅 芙 蓉

幾歳を旅につかるゝ頬はやせぬ相見ん人の胸い

かならむ

○ 吾 妻

若者の笛にあはせて少女等が舞ふ手やさしき里

のくれ哉

さし上る月の光を脊に浴びて里の小路をふたり

語り行く

月に星に希望の光てり充ちぬ奮ひ起たすやあは

れ人の子

○ 起 雲

詩に瘦せて朽ちん兒われに情あらば野の趣を語

りませ人

筆とりて唯黙想の興やらむ秋の野ゆふべかねひ

やゝかき

冷かき石をしとねの野に生ひて塵の世隔つ花た

らば足る

* * * * *

短歌に付て

應募の歌が割合に少ないので三光を撰ぶことが出

来ませんから今回はみどり會女子部の歌を掲げま

した、次號よりはどしどし御投稿ください短歌に

経験のない御方も御稽古と思つて精々やつて貰い

たいです、送り先は左に

▲課題、随意▲べ切、毎月十五日▲發表、本誌上

▲賞品、三光に粗景▲撰評、眞宮起雲

▲投稿 用紙隨意左の所に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村 みどり短歌會内

眞宮起雲宛

記者白す、眞宮先生は、特に本會員及本誌購讀者のために、和歌の選評をやつて下さることになつて居ます。斯道に志のある方は申すまでもなく、今から入門しようといふ方も奮つて御寄稿なさつて、お互に、清い樂としようじやありませんか。

多摩川の川上なる鶴の湯に
まかりける時よめる

埼玉桑田良隆

老しらぬ鶴のいでゆにゆあみして千歳の飾われも重ねん
寢覺めては雨かとはかり谷川の岩にせかるゝ音を忘れて

夢ひやにて

知らぬ事は知らぬといひてうなわ子のかさるゆのなきそうれしき
折にふれて

外國のふみはよむとも皇國の正しき道は忘れさらなん
思ひやれ支那のあら野に武夫かつゝを枕に明す夜毎を

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 毎月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品 天地人三座には景品を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にてても投吟する事を

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)
住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛
にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛